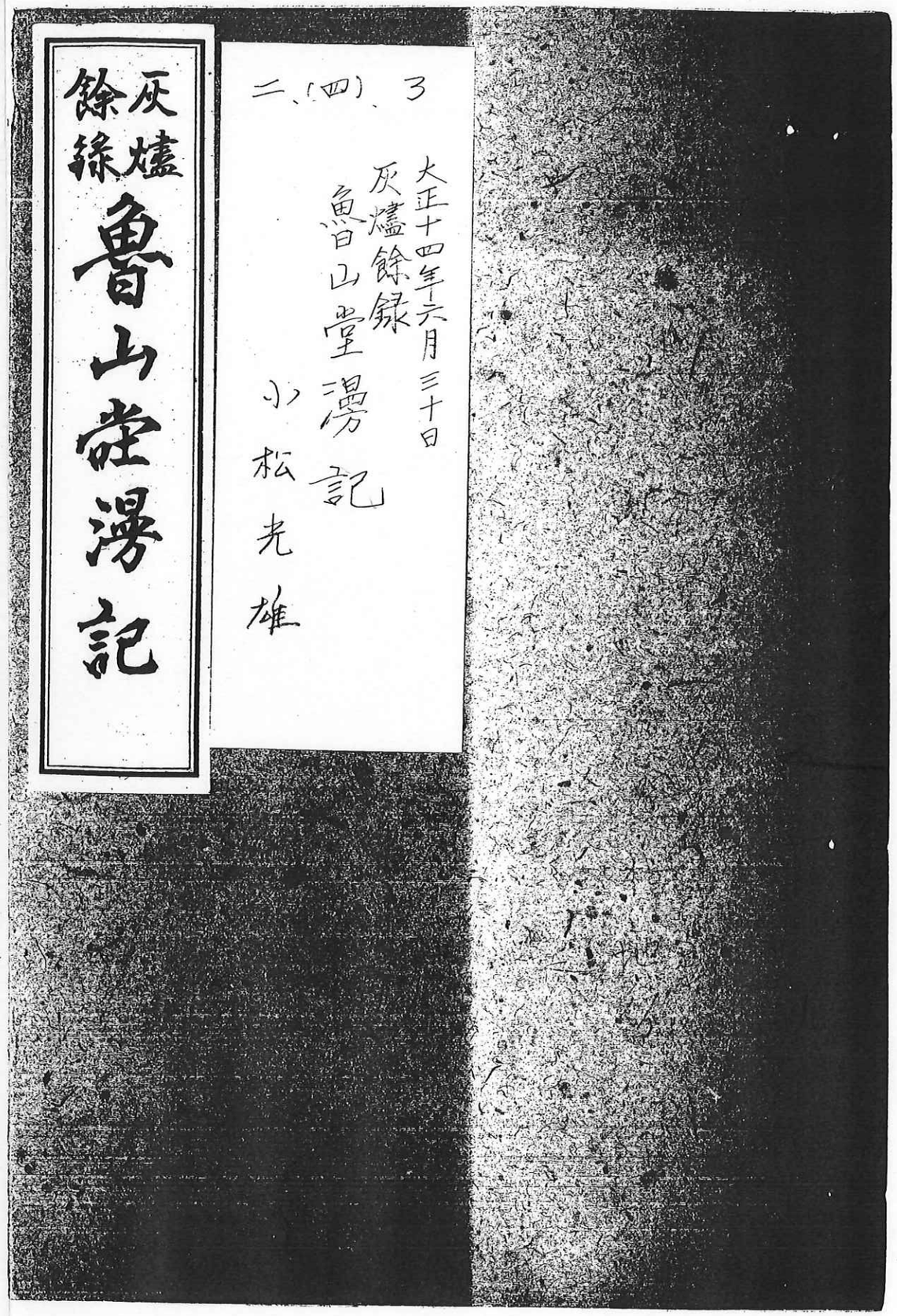
大正乙丑初夏五月

灰燼餘録

魯山堂湯記

小松春翠手稿



灰燼餘録

魯山堂湯記

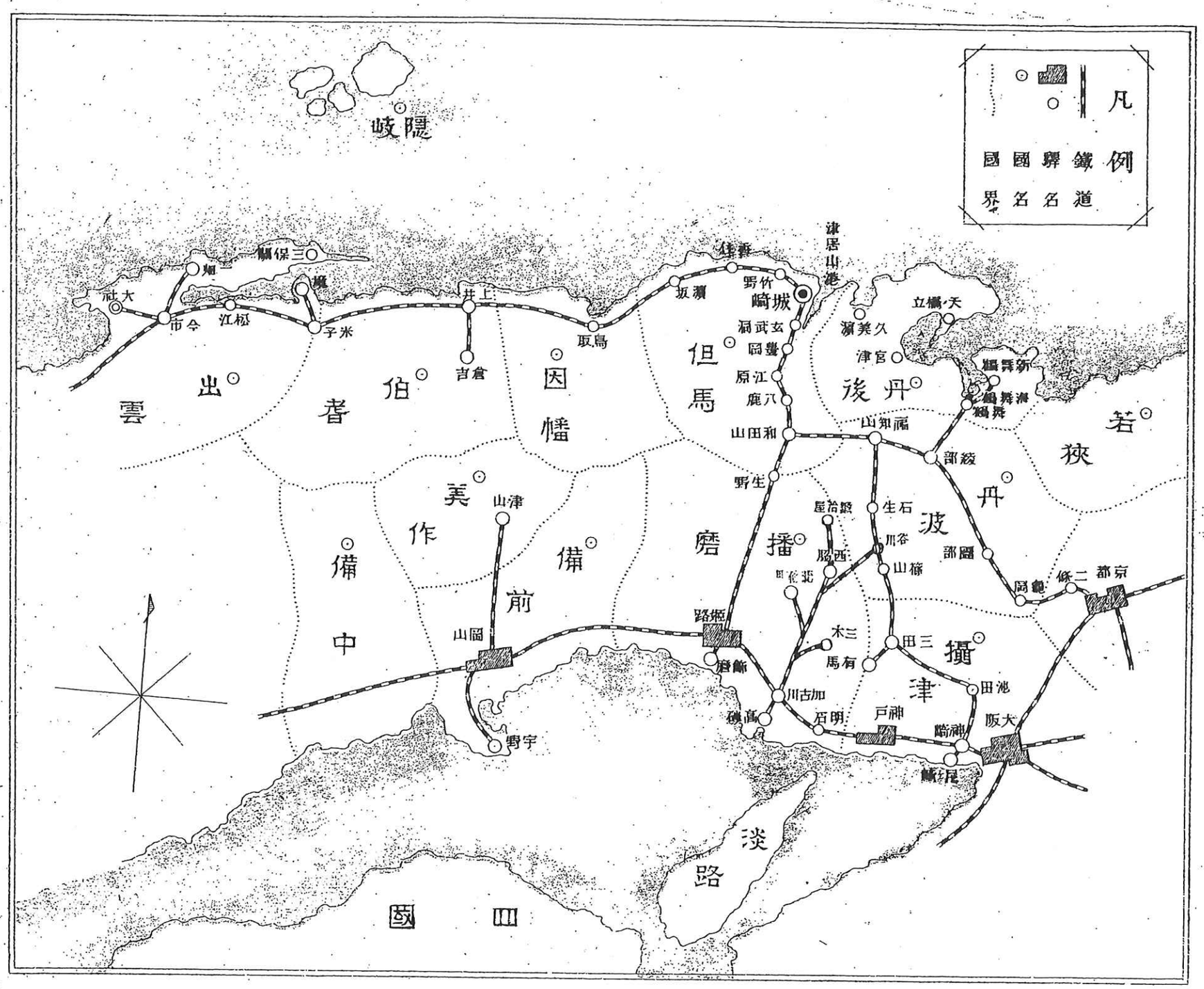
二、(四)、3

大正十四年六月三十日

灰燼餘録

魯山堂湯記

小松光雄


凡例
鐵道
驛名
國名
國界
隱岐
出雲
伯耆
因幡
但馬
丹後
若狭
美作
備前
備中
磨播
摂津
淡路
國四
大社
市今
江松
三保關
米子
倉吉
井上
取鳥
佐賀
竹野
崎城
津居山港
玄武洞
豊岡
久美浜
津宮
天橋立
新舞鶴
舞鶴
原江
八鹿
山田和
福知山
綾部
野生
生石
屋爲
川谷
山篠
脇西
部園
園部
亀岡
二條
都京
山津
路姫
山岡
三木
馬有
田三
曆飾
川古加
田池
礫高
石明
戸神
崎神
阪大
野宇
鳴尾

恭啓

梅雨連日聞點滴陰鬱之候會員各位益々御勇健御同慶奚存候陳者客月二十三日勃發致候北但地方の大震火災は關西にありては稀有の大天變に屬するを以て會は救護班を編成二十六日被害地に出動し班員各位は平素の鍛練と誠意とを以て救護任務に盡瘁せられ候事は罹災人士にありて歡喜無極と被存候班員出發當時本員は恰も會の一員として又一市民として被害地に於ける姻戚舊友消息探尋の爲め出向に際し一行に邂逅し幸ひ其行を共にすることを得大に吾人の意を强ふし且つ便宜を得たる事を感謝致候班員の行動に對しては既に正式に報告せられあるを承知する所に有之本員は非公式に慘禍地の實況を概記して灰燼餘錄と題し一小冊子を編纂し他日の追憶に供する事と致候間左記之通り寄贈致候に付夫々御傳呈被成下度此段得貴意候也匆々如此　敬具

左記

大正十四年六月二十八日

帝國在鄕軍人會明石市分會
名譽會員　小松光雄

帝國在鄕軍人會明石郡市聯合分會長
伏屋哲造　殿　侍史

啓上

本會の名譽會員小松光雄(春翠)氏より前記書翰寫之通り自著灰燼餘錄を貴方へ贈呈方申出相成候間一部傳呈仕候に付御閲讀被成降度候自然現冊御接手之御報相成候場合は寄贈者本人左記居住所宛直接にて宜敷候間御含み置被下度此段申副候　拜具

寄贈者
住所氏名　兵庫縣明石市當津村三百八十八番屋敷　小松光雄

以上

大正十四年六月　日

帝國在鄕軍人會明石郡市聯合分會長
伏屋哲造

伊地智所長

大正乙丑初夏五月兵庫縣管下北但地方に激震來り火災起り津居山久美濱港邊も亦震害を蒙り海嘯の襲ふ所となる。予城崎、豊岡両地方に於ける姻戚舊友の動靜を問ひ併せて非命者の靈を弔す。即ち其慘狀の所見概要を記して他日の追憶に供せんとす。

春翠生

灰燼餘錄

(一)

大正十四年五月二十三日午前十一時十分。突如屋舍動搖して人體に強震を感じ。計時器の廻針倏忽停まり。人々戸外に逃れ出で。恐怖戰慄して物情騷然たり。蓋し攝播の地方にありては大正五年に來りし震度に次ぐの强烈なりしが如し。浪華の任所に執務しつゝありし長子碧潮は。電話して家庭の安否を問ひ來るあり。擧家異狀無きを答ふ。而して其震源地は那邊なりしやを知るに由なかりし。午後二時頃に到り各方面の電音頻りに達し、新聞紙亦號外を續發して先づ豊岡町の凶變を傳へ。續いて城崎町全滅の悲慘事を報す。翌廿四日忽ち想ひ起す。神戸に在住の先輩草鹿甲子

太郎翁(法學士辯護士)は城崎に湯治中なるを。仍て神戸なる翁の自邸に電話して其消息を問ふ。夫人以登子女史聲に應じて曰く。主公は恰も油筒屋旅館(名門西村六左衛門氏の經營に關る)に滯泊靜養中此震災に遭遇せしも。翁の起臥に宛てられたる一室は幸に倒壞を免れ。咄嗟の間に有合せし炭酸水を火鉢に濺ぎて火氣を消し。疾く浴衣を旅裝に着更へ室を脱し。身に微傷だも負はず九死に一生を得て三里の山路を徒歩して豊岡驛に辿り着きしは其日午後五時にして。恰も震後初發の列車に乘込むことを得。阪鶴線を經て其夜半神戸の家庭に入れりと知り安堵の思をなす。予は翌二十五日早起翁を神戸上筒井なる開運毘沙門天碑畔の邸に往訪して慰問の意を致し。更に當時の實況を聞きたれば。遲れ馳せに翌二十六日午前六時三分明石驛發の列車に搭乘し被害地に向はんと曉起輕裝して俥を疾驅し驛庭に入れば。恰も明石在鄕軍人會救護班の一團震災地に赴かんとするに會せり。一行の勇士は皆之れ相識れる人。即ち

班長(市會議長陸軍々醫)國賀至

班員　松村由松
同　武本竹次
同　鳥居周一
同　野澤林之助
同　小野石松
同　安藤長次郎
同　倉本一市
同　藤原勘吉
同

の諸氏と外明石郡衙より派遣の片山平三郎郡書記と同行するを得たり。此際本市廳よりは市長代理別府助役、宮澤庶務課長も一行を見送れるを認めたり。

姫路驛にて播但線に移乘す。車室は各地の救護班又慰問客にて充滿し。皿に桃を盛りたるが如く立往生する人多く。皆今曉の餘震の激甚なりしこと人生の果敢なきことを語り合ひ何んとなく不安の顏色あり。和田山驛に到れば一群の乘客を增し

混雜名狀すべからず。八鹿驛以北の沿線には田畑の間に仮屋を結べる者。又露天にて炊事をなせる家々の有樣は。如何に人心の恂々たるかを想見せしむべし。豐岡驛に到着せしは十一時一分にして。此地の訪問は歸途に廻はし單に停車場附近の慘狀を見る。驛前通りの如きは全く焦土と化し。舊時の面影を存するもの一物もなく。紅蓮の焰に包まれし人々の右往左往に狼狽して逃げ迷ひし當時の光景は。想像するだに戰慄を禁じ得ざりき。今尙ほ阿鼻叫喚の哀號が耳底を强烈に衝動するが如く感じたり。列車は進みて玄武洞驛に到る。玄武洞は鄕人にありては造化の神も誇稱する奇蹟とし。山陰唯一の異觀と自負するの名勝にして城崎川の東岸に在り。俗に石山と呼び舊時は石柱洞又蜂窠洞と唱へしとか。洞門幾列全洞塊石を以て成り結構齊整一大厦屋を形造り。內部廣濶にして千餘有人を容るを得べし。文化年間柴栗山此奇勝を探りて玄武洞と命名せりと聞く。斯る奇絕壯觀も大破壞の災厄に罹れるを見る惜むべし。

（二）

城崎驛に到着せしは定刻の十一時二十分にして。驛頭一望燒野原と化せしは何たる慘狀なるか。若し現世に終滅の日ありとせば恐らくは此光景を云ふなるべし。壁數尺瓦一片だに完全と名付くべきものなき。滿街の灰燼に直面して文字通り暫時啞然として佇立するの止むなかりき。同行したる明石市の救護班は第三十九聯隊の分營鳥取聯隊（指揮官陸軍歩兵大尉藤田久太郎氏は明石市出身にして友人素門藤田又右衛門氏の季弟）の屯營所に到り。其司令の許に救護の任務に就くべく雄々しき姿を動かせり。予は驛前に急設せられたる城崎町役場の臨時事務所に。應接と指揮とに遑なき西村町長（佐兵衛氏）を訪ひて。慰問の意を致し且つ草鹿翁の消息をも傳へへたり。町長より審かに當時の狀況を聽取し終つて。焦熱地獄跡とも云ふべき路筋に異臭と紅塵とに面を打たれつゝ。三木屋旅館主片岡平八郎一家の避難所なる。西別業裏山の麓孟宗竹林中に急造せられたる藁小屋を訪へば。其邊りに彷徨しつゝありし片岡父子は淋しげなる笑を漏らしながら。予を迎へて大俎板の如きものに古毛氈を展べたる座を設け。言辭より先立つものは涙にて固く予の手を握り。恐怖の追想に戰きながら語り出だせる處に據れば。憐むべし一人の下婢は逃げ出でんとする塗端。倒れ來れる石燈籠に頭部を擊たれ腦震盪を起し。救ひ出ださんとする主人に何か言はんと欲するものゝ如くして能はず。其儘瞑目したるは悲慘の極はみにて。今も尚ほ其俤が眼前に彷彿たるあり。其他の一家族は辛くも身を以て遁れたるも。斯の如く物質の總てを擧げて全滅の悲運に遭遇したるも。天の爲せる災は人力を以て左右し得ざるを今體驗したれば。只此上は復興に努力するの一途あるのみなるを觀念せりと。打ち沈みてありしは洵に同情の至りに堪へざるなり。予は片岡父子に對し一家の人々が唯だ九死の中に一生を得たるは。切めての幸福なりと云へる慰藉の言辭も。此時にありては世上普通の辭令には決してあらざりき。予は斯の如き急劇なる變遷に感んじつゝありしが忽ち西別業の舊山泉を夢幻の如く眼前に映寫せり

（三）

三木屋の西別業は翠綠滴るが如き山麓を清泉潺湲として流れ。鶴鷺歩渉し鴛鴦游遊し山猿時に來り戯れ鮮苔濃厚にして自ら塵なく。山水の自然を占めたる佳趣に富める名園も。憐むべし激動一瞬の後には山も樹も黑く燒け赭く焦がされて。清流は泥土に濁り四邊の惡臭鼻を衝き現實の悲劇を展開して餘す所なし。予曾て城崎温泉史を閲みして記する所あり。开は今を距ること一千三百五十有餘年前。卽ち舒明天皇の御朝にありて何處よりか。脚部を病める一羽の鴻飛び來り。日々叢中の湧泉に浴せるを見つゝありしに。幾許ならず其局部全癒し翱翔自由となり去つて復た來らず。耕夫等怪しみて試に其湧泉を探りしに温氣あるを感じたれば。里人相謀り其處を穿ちて温湯の濆出するを得たり。是れ卽ち温泉地となれる創始にて之を鴻の湯と命名したりと。爾來幾多の長歲月を經過し曾て天災地變の異動を生せざりし此境域を。天は突如として局面を一變せしめ。山泉草木の清趣も。畫欄湘簾の樓屋も。忽焉眼界に映ずるものは只焦土のみにして。此慘禍中の人に加へられたる不幸の片岡父子に別を告げたり。尙ほ處々に餘焰起ち昇る邊りを脂汗を拭ひつゝ足に任せて歩める時。一海軍士官が佇立瞑目合掌して何事か口誦せるを見る。傍人の語るを聞けば此地に湯治中の僚友海軍中佐夫妻は。屋舍倒壞の際逃げ遲れ壓死せる上に燒け焦げたるを發見し弔意を表せるなりと。聽て其士官は兵曹と水兵とを指揮し僚友夫妻の白骨を懇切に拾ひ集め。頗る敬虔の態度にて淨器に收容し去りしは感慨無量なりし。緣類の引取人なき死體の箱詰に只男女と記せるもの。幾個かを積み重ねられ恨の鬼臭を放たれあるもの。燒木立の山谷を上下し關係者の遺骸を搜索しつゝあるもの。冷却したる浴槽を清掃せる消防夫。煨燼の木片を整理せる青年團。非常を警戒せる軍人、警官。救護醫療に從事せる篤志班。糧食雜品を運搬する諸雇夫等も唯默々として靜肅に行動しつゝあり。不意に大塊を根底より顚覆せられたる驚愕の一瞬より。悲劇を實現せられたる刹那より。人々の頭腦は一途に復

揮し混乱跡の整理に多忙の裡にありしが。予を迎へて仮住居とせる倉庫の一部に座を設け語り出づる所を聞けば。恰も居宅の位置は前面に堀を控へ地盤高かりしゆゑ。幸ひ火災は當家にて防止し得たるも。屋舍の柱は盡く折損し到底其儘修理を施し能はざるの大破損を蒙りたり。又火災起ると見るや急遽倉庫内に貯藏しありし火藥全部を井中に投入して爆發の惧を除きたり。之が爲め飲料水にも事を欠き困難をせりと。仍て予は與へられたる洗面水を辞退せり。草鹿翁は自室を脱するに當り火鉢の火氣を消し。國富氏は火災を豫知し火藥を井中に投入して危險を防止したり。両氏何れも造次顛沛の間に處して其用意の周到なる敬服すべし。之れ即ち平素の修養は心事沈着の表現を知るべし。此談話中にも數回の餘震あり使用人は毎回戸外に走り出づ。如何に恐怖心に驅られあるかを想はしむべし。予は後刻再訪を期して一旦國富家を辞去し。郡長町長を歴訪すべく其方面に歩を移せり。

（五）

國富家に隣接せる豊岡小學校の廣き校庭には各所に天幕張の事務所を設けられ。郡吏町吏は皆草鞋穿の輕裝にて執務に忙殺せり。予は一郡吏を經て磯野城崎郡長（鵜太郎氏）に刺を通じ來意を告ぐ。氏は此日賢き邊より御差遣の侍從來着の奉迎準備。又本縣より來援の各官等と諸般の應急事務に鞅掌し劇忙裡に。予を迎ふること頗る慇懃なり。予は先づ明石の一市民として此大事變を慰問し。草鹿翁の消息を語り友人出水君の慰問の辭を致せり。氏は大に其好意を謝す。予は忽ち想到す磯野郡長は那邊より來れるか震災以前既に明石市長候補者として交渉あることを。氏は斯る大災害に遭遇し其復興の重要任務を前にして。果して之が應諾を與ふる歟否耶。予は今市會の一員を退きたる者。市政に言及する直接の責務なく。又其機會にあらざるを以て急遽辞去し。傍ら豊岡町長に面接して慰問の辞を述べたる後。再び國富氏邸に到る時主公も亦歸來するに會せり。予は主公と簡單なる久濶の叙辞を交換して復興意見の諸般を聽取す。主公は邸内破損屋舍の狀態を巨細に指示し。建築當

時に於ける基礎工事に對しては最も深き注意を拂ひ。杭擊。混凝土。柱石等に力を要したれば。本屋は建物の破損程度に對し地盤には更に異動を見ず。尚ほ倉庫の如きは一層其点に心を籠めたる爲め。地盤は固より建物にありても些の毀損なきを得たりとあり。如何に基礎工事が苟且に付すべからざるを今更の如く感じたり。斯くて談話二時間の後辞去し午後五時二十分豐岡驛發の列車に搭乘し災害地を後にして歸途に就けり。途中柳瀬驛附近朝來郡與布土村の素封家篤志者にして會心の友。奥太右衞門氏を訪問するの豫定なりしも被害なかりしを聞き通過し。姫路驛より神姫電車に移乘して夜十一時大歡橋畔の家庭に入れり。

予は今回北但の大震災地域を實視し。全く關東大震慘禍の縮圖と云ふべきを想はしめたり。關東の大震に就ては有識者曰く。近時滔々として移り行く我國民思想の惡化と浮華輕佻は。法律の權威、敎育の涵養、宗敎の功力も救濟し難きを以て。天譴を下し警戒せられたる歟と。然かも國民は今尚ほ之を自覺せざる者多きが如く。內容

充實の緊要事たるを閑却し。漫りに歐米に於ける物質文明の摹倣に沒頭し。文化の精粹を得たるが如く夢想せる者あるを以て。之を覺醒せしむべく再び關西に天變を下し。大震災は獨り關東のみに止まらず。何れの地点にも勃發することを所したるものならん歟。予は只犧牲に供せられたる被害地域の人士に對し。深甚なる同情を寄する者なり。冀はくは劈頭第一に世を過る半解學者、無悟宗敎者、輕浮爲政者、朝菌富者等の奇怪なる者は宜しく猛省し。華を去り實に就くべしとの尊き聖旨を奉體して。我日本帝國の基礎を鞏固ならしむべく。大和民族の固有たる質實剛健の氣風を助長せしめ。其根底を養成するに力めて以て邦家を泰山に安置せんことを祈るものなり。被害地域の復興計畫に當りても特に温泉浴客地たる城崎町にありては。建築物を簡素にし基礎を鞏固にし以て萬一に備へ。庶民をして經濟的に容易に靈泉療養の天惠に浴せしむるの施設あらんことを望む。聊か卷尾に所感を贅して灰燼餘錄を擱筆することゝせん。

（大正十四年五月二十六日夜於汽車中起草）

大正拾四年六月二十五日印刷
大正拾四年六月三十日發行　非賣品

著作者　小松光雄
兵庫縣明石市覺濟村祭八八番屋敷

發行兼印刷者　池平熊太郎
兵庫縣明石市大明石村貳七六番屋敷ノ一

印刷所　明石合同印刷株式會社
兵庫縣明石市大明石村然七六番屋敷ノ一